

「国際教育夏季研究大会 SHIEJ2025」

2025年8月8日作成

場所：京都先端科学大学

期間：2025年8月6日～8月7日

## 1. 研修の内容

SHIEJ2025は、「テクノロジーと多様性は国際教育をどう変革するか—問われる高等教育の社会的役割—」というテーマで開催され、大会概要には以下のように記載されている。

「今日の国際教育では、文化的多様性を重視するプログラムが展開され、教育手法、参加学生層も多様化しています。一方、AI、デジタル技術が積極的に活用されており、オンラインによる多様な教育交流の手法が実現してきました。「多様性」の確保と「テクノロジー」の活用は国際教育における喫緊の課題となっています。(中略) オンラインによる教育交流、AIをはじめテクノロジーを駆使した交流プログラム、デジタル・マーケティング、オンライン・アセスメントなど、国際教育におけるテクノロジーの活用に焦点をあてたワークショップやセッションを実施していきます。」

**8月6日**は、以下のセッションおよび基調講演に参加した。

- ・ セッション1「SHIEJ初めの一歩」：参加者同士による交流を目的としたセッション
- ・ セッション5「身体的アプローチから学ぶ異文化受容とストレスコントロール」：身体的なアプローチを通じて、異文化受容を体感的に捉え直し、それを国際教育の現場や自身のストレス・マネジメントに活かすことを目的としたセッション
- ・ セッション6「国際共修のプロジェクト活動におけるAI活用とコミュニケーション」：関西学院大学における2025年度春学期「多文化共修科目」の授業を対象に、AIを活用した異文化間コミュニケーションの促進について検証した研究成果の報告
- ・ ポスター02「多文化交流ラウンジ「ここあ」における取り組みと今後に向けて」：留学生が自分の心身に向き合い、セルフケアやリラックス方法を学ぶ機会を提供するとともに、参加学生同士の共修・交流を通じて互いに励まし合えるネットワークの構築を目指す、名古屋大学の取り組みに関する報告
- ・ オープニングイベント「高等教育の国際情勢とこれから」(文部科学省高等教育局参事官 佐藤邦明氏)、開催校による基調講演「多様性とテクノロジーが拓く未来：KUASが目指すストリートスマート人財育成」(京都先端科学大学副学長 田畑修氏)

**8月7日**は、以下のセッションに参加した。

- ・ ワorkshop D「学生/私たち自身の多様性を“可視化”する：BEVI×BEVI-ChatGPTの活用」：国際教育の成果を客観的に測定するツールの一つであるBEVIの活用事例を通じて、教育実践への活かし方を参加者間で共有・議論することを目的としたワークショップ

## 2. 研修の成果

セッション5では、身体反応を言語化する際に、異文化理解の文脈でしばしば使われる「冰山モデル」を活用していた。実際に体を動かし、同じグループの人とのディスカッションを通してリラックスできるとともに、無自覚な緊張にも気づくことができた。講師である荻野氏の授業でも、受講生から「5限なのに眠くならなかった」というコメントがあったとのことで、身体的アプローチは、教員自身のみならず、受講生のストレスマネジメントにも活用できる有効な手法であると感じた。

セッション6では、国際共修にAIを活用した授業実践の報告であった。授業でのAIの活用が、国際共修授業の受講ハードルを下げ、言語能力の差を補うだけではなく、AIを介さない議論を求める声(外国語の学習への動機づけ)につながっている点から、AI利用の可能性と効果についての示唆を得た。

セッションで同じグループだった矢島氏(名古屋大学)のポスター02報告では、留学生の6割を占める大学院生を対象にした支援活動の報告であった。本学では、外国人留学生・大学院生に対する支援は様々あるが、支援が十分に届いていない可能性のある学生の存在に気づかされた。

オープニングイベントでの佐藤氏の「どうやって平和的な多文化共生社会をつくるのか」という問いに対し、その実現の“Gateway”は高等教育であるという言葉が特に印象に残った。

ワークショップDにおいては、多様性を可視化するBEVIについての基礎的な情報および導入している6大学の実情を聞くことができた。また、登壇者別にグループにわかれてのディスカッションに参加し、授業単位での導入方法や「多様性」の捉え方について詳細を聞くことができた。

午後の特別講演では、JV-Campusをはじめとする国際共修先進校(関西大学、東北大学、筑波大学)の取り組みについて、最新の情報を得ることができた。

## 3. 授業への研修成果の反映(予定)状況

セッション5の身体的アプローチを秋学期に担当する授業(日本発信応用および異文化理解)で活用する予定である。身体接触を伴う活動となるため、事前に受講生に実施の可否を確認し、難しい場合には、冰山モデルを利用した活動に変更して、実施する予定である。

日本発信科目では、既に成果物の作成過程でAIを利用した経験があるが、今後は立案企画の段階でもAIの活用を授業設計段階から検討したい。

ワークショップDでは、国際教育の成果を、心理尺度を用いて測定するBEVIの利用と実際の運用に関する情報を得た。BEVIについては、トライアルバージョンの導入が可能であれば、次年度に担当科目(日本発信科目および異文化理解)への導入を前向きに検討している。事前・事後に導入することで、学習効果を客観的に測定する手段として有効であると考えており、学習成果の可視化と授業効果を検証し、その結果をもとに授業改善を行いたい。

今回の研究大会では、国際教育におけるテクノロジーと多様性の融合に関する多くの示唆を得ることができた。これらの知見を今後の授業実践に積極的に活用し、学習環境のさらなる充実と教育効果の向上を目指していきたい。

学習・教育支援 センター委員長	名古屋教務課長	係